

気概をもって 業界全体で 変革に取り組む

当社の創業者・井上貞治郎は、日本で初めて段ボールを開発し、「段ボール」という言葉自体を作った人でもありました。彼が明治から大正、昭和を通じ、苦労に苦労を重ねて事業に取り組んだその壮絶な人生は、テレビドラマや映画、芝居の題材になるほど見事なものでした。彼が終戦直後の紙が不足していた時代にも必死でこの業界を支えようとしたのは、段ボールというものは多くの産業に必要とされる重要な産業だという信念があったからです。

この創業者の信念に、私は常に共感を抱いてきました。段ボールは、工業製品から農作物まで、とにかくいろいろな産業が生み出す商品を保護し、それを国内外の各地に輸送するうえで欠かせないものであり、その意味で産業の発展を支える重要なサポーター・インダストリーだと考えています。

ところが、今の業界の状況をみて時おり歯がゆく思うのは、この業界の多くの経営者たちがどうも自分たちの地位を低くみる風潮があることです。家内工業中心でやっていた時代の名残をひきずっている部分があるのかもしれませんが、自分たちはどうせ下請けだからお客様の要求に無条件に従っていけばいいんだという気質が抜けず、そのことがこの産業を強くするための業界改革を阻む要因となっていた気がするのです。板紙・段ボール産業は、日本の板紙・段ボール産業だけをみても15兆円規模の生産量がある、実はとても大きな産業です。にもかかわらず、そのことを自覚していない経営者がたくさんおられたのですが、機会あるごとにこの産業の重要性を説き、業界全体の地位向上に努めてきた結果、ようやく業界改革が進みだしました。

業界全体としてレベルアップをはかるには、国際的な連携も必要です。今年4月、私は国際段ボール協会（ICCA）の会長に就任しました。ICCAは64カ国



大坪 清氏

Kiyoshi Otsubo
レンゴー社長

の団体・企業で構成される段ボール産業の国際的な業界団体で、段ボールのもつ強みや弱みを分析して今後の方向性を議論したり、会員間で各種の課題についての研究を分担して取り組むといった活動をしています。

段ボールの強みといえば、例えば、プラスチック製のコンテナと違ってリサイクルが可能なので環境にやさしいことや、表面に印刷することが可能なので流通段階においては広告媒体にもなりうるといったことがありますが、半面、各地域の産業に対応して発達してきた地域産業としての側面があるために、地域ごとに規格が異なる状況があり、これをある程度統一し、効率化させていくことは一つの課題となっています。

また、最近ではICタグへの対応という新たな課題も出てきました。一昨年、米国のウォルマートがトレーサビリティ（生産履歴追跡）に関するシステムを構築するに際し、段ボールを使う納入業者に対してRFID（Radio Frequency ID）、いわゆるICタグを段ボールにつけることを求めました。現段階ではまだいくつか課題が残されていますが、それがクリアされて本格的に導入されるようになれば、段ボールは輸送と保護材としての機能だけでなく、情報発信ツールとしての機能もあわせもつようになります。

こうした新たな可能性への挑戦も含め、ICCAを中心に、世界、特に日米欧の企業が情報交換を行い、技術開発等で協力しあうことは、今後の発展のためにたいへん重要なことだと考えています。

談